Conative verbs[1]の下位分類について　ー歴史的観点からの試論ー

遠峯伸一郎

1．はじめに

Green (1974)は英語の動詞 attempt と endeavour を取り上げ，その補部に見られる ModE から PE の統語的変化が，同時期に起きた意味の変化に関係していると主張している。PE において，attempt は補部の to 不定詞の省略に制約がある。

(1) a. John *attempted the lock.*[2] [ibid.:54]

b. *I'll try to persuade the chairman and you can *attempt the dean.* [ibid.:55]

(1a)では，attempt と the lock の間に例えば to open が省略されていると考えられる。この省略には制約があり，(1b)に観察するとおり，省略後に残留する目的語名詞句が有生であってはならない。しかし ModE では残留する目的語の無生・有生に関わらず to 不定詞の省略が可能であった。

(2) How should I escape from them, if they *attempted me.* [ibid.:65]

(2)においては attempted と me の間に例えば to kill が想定される。

このように，attempt は ModE から PE までの間に to 不定詞省略の可能性を狭めている。これと同時期に attempt は意味変化を起こしている。ModE において attempt は「誘惑する」の意味を持った。

(3) Nothing will be found, I fear, to *attempt a man* to be a thief. (1773) [ibid.: 66]

「誘惑する」の意味は PE では失われている。この意味変化が上述した to 不定詞省略の制約に関係していると Green は示唆している。

他方，endeavour は，PE では to 不定詞の省略が一切不可能であるが，ModE では可能であった。

---

[1] Conative verbs とは'strive', 'try'の意味を持つ動詞である（Los 2005）。これらは現代英語（以下 PE）において典型的に to 不定詞を取り起動相を表して使われる。以下ではこれらの動詞を「労苦の動詞」と呼ぶ。

本論では英語史の時代区分について以下の通りとする。古英語（以下 OE）は紀元後 450 年から 1100 年の英語を，中英語（以下 ME）は 1100 年から 1500 年の英語を，近代英語（以下 ModE）は 1500 年から 1900 年の英語を，PE は 1900 年以降の英語をそれぞれ指す。

[2] 例文中の強調は筆者による。以下も特に断りのない限り同じである。

(4) a. *John endeavored *the lock*.[3] [ibid.:64]

b. ... every man ought to endeavour *peace*, as far as he has hope of obtaining it (1651)

[遠峯 2011:57]

(4a)では，the lock の前に例えば to open の省略が想定される。このような省略は，PE では(4a)に見るとおり容認不可能であるが，ModE では(4b)に見るとおり可能であった。この対照について Green (ibid.)は，ModE で endeavour が"to exert oneself"に加えて随意的に"to exert oneself for the purpose of"の意味も持ったために生じたとしている。後者の意味は PE に至るまでの間に失われ，それとほぼ同時期に PE に見られる省略の制約が生じたと彼女は主張する。

(5) a. *John couldn't convince the dean, although he *endeavored*. [ibid.: 64]

b. The pardon of his Holines, giuen to all ... that ... *indeuor* in this quarrel. (1588) [ibid.: 65]

PE では(5a)に見るように to 不定詞を省略することは容認されないが，ModE では(5b)に見るとおり容認される。

上述の事実が，Green の示唆するように，意味変化の補部形式に対する影響を示すものであるならば，２つの疑問が生じる。１つは，ModE において観察された attempt と endeavour の性質はこれら２つの動詞に限定されたものであろうか。この２つの動詞はいずれも to 不定詞を取る労苦の動詞であり，起動相を表すという性質を持つが，類似の意味を持った他の労苦の動詞も attempt と endeavour と同じ性質を ModE において持つだろうか。もう１つの疑問は，attempt と endeavour に見られる統語的振る舞いの違いはどのような意味的要因で生じているのだろうか，というものである。そこで本論文では，attempt と endeavour を含む 37 の労苦の動詞について，ME から ModE の調査を行い，attempt, endeavour に見られる対照が労苦の意味を持った他の動詞にも観察されることを示す。そしてこの対照は意味的な説明が可能であることを示す。

本論の構成は以下の通りである。第２節では本論で収集した資料を示す。第３節では第２節の資料にもとづいて ME, ModE における労苦の動詞の性質について考察する。第４節は結語である。

２．資料

本論で調査対象とするのは次の 37 の動詞である。これらは，Visser (1963-1973:1336)が，to 不定詞を目的語として取る"verbs of trying, attempting, undertaking, etc."として挙げる動詞リストから抽出した[4]ものである。

---

[3] (4a)は，the lock の前に例えば to obtain が省略されていると考えられる。

[4] Visser (ibid.)では cun は cunnian に，entermete は entremet に，attaste は ataste にそれぞれなっているが，本論では Simpson and Weiner (eds.) (1989)(以下 *O* とする)の見出し語形を採用した。また Visser は aspy と espy，そして assay と essay をそれぞれ別の語彙として挙げているが，本論では *O* に従ってそれぞれを前者で代表させてある。

(6) apply, aspy, assay, attaste, attempt, attend, contend, cun, endeavour, enforce, enterprise, entermete, envy, force, fraist, intend, hunt, invent, labour, look, make, offer, press, procure, prove, purse, seek, strive, struggle, study, sweat, swink, taste, till, travail, try, undertake

これらの動詞は本来語 cun, look, make, offer, seek, sweat, swink, till, undertake を除いては，ME で英語に借用された語彙である。そこで本論では ME, ModE を対象とし，*O* および Kurath et al. (eds.) (1952-)（以下 *M*）の各項目に記載された例文を収集した。さらに attempt, endeavour については遠峯 (2011, 2012)の資料も加えた。

(6)には，PE までに廃語になっているものや，語自体は PE にも残るが労苦の動詞としての意味・用法を失っている（あるいは古風なものとしている）動詞も含まれている。まず前者の例を挙げる。

(7) a. Heom.. þet *cunnið to beon* cleane. (a1225 *St. Marher*. 13)[5] [*O*]

b. That none of us shall *entremete* hym *to doo* that ye spek of. (c1500 *Melusine* 69) [*O*]

(7a)の cun は"to try to do something"の意味を，(7b)の entermete は"to set oneself, undertake to (do something)"の意味を持っている[6]。これら２つに加えて，attaste, envy, fraist も PE までに廃語となっている。

次に，語そのものは PE に残るが，労苦の意味を失っている（あるいは古風なものとしている）動詞の例を挙げる。

(8) a. Whan the Cane *lokyth for to haue* his solas at the wilde bestis or foulys, he may sen hem ben takyn at his wil. (a1450 *Mandev*.(3) (BodeMus 116) 125/5) [*M*]

b. Thar-for ert þow mys-byþoȝte, To *procury* hym *to slee*. (c1380 *Sir Ferumb*. 5825) [*O*]

c. Þei..*studyeden to stroyen* hym and stroyden hemself. (1377 Langl. *P. Pl.* B. xv. 587) [*O*]

(8)では look, procure, study が，PE で一般的な「見る」「調達する」「学ぶ」ではなく労苦の動詞

Visser のリストに含まれている語で本論の対象外とした語は以下の通りである。まず fond, found であるが，両者は ME で綴りが同一になることがあったことから混同が生じていた可能性があり，正確な分類が不可能と判断し，調査対象外とした。次に win, work であるが，*O*, s.v. *work* 1, *win* 1 に労苦の意味は OE に限定されているとの記載があり，対象外とした。さらに，bewin, draw, fon, fong, gefon, genægan, hunt, keep, opnim, stand in, tosettan, underfon 及び心的状態の動詞 care, mourn, muse, stem, think, understand を除外した。前者は Visser の例を検討する限り to 不定詞を取っているとは判断できず，また後者は意味的に労苦の動詞ではないためである。なお，後者は，意志(volition)の意味を持つ動詞であり，この意味的特徴は Rudanko (1989)によれば，PE で主語コントロール to 不定詞を取る動詞の特徴である。本論で扱う労苦の動詞は意志の動詞の一部であり意志の動詞とは意味的に深い関係があるが，ここでは考察の対象外とし今後の課題としたい。

[5] *O* から引用した例の出典については *O* における表記を踏襲した。以下も同じである。

[6] これらの語義については，それぞれ *O*, s.v. *cun*, †b, *O*, s.v. †*entermete* 1 を参照されたい。なお，(7b)では entermete は再帰動詞であり，to 不定詞に加えて再帰代名詞も現れている。

として使われている[7]。これら以外に attend, contend, enforce, force, intend, hunt, invent, make, press, prove, pursue, sweat, taste, till, travail も同様に PE では労苦の意味を失うか古風なものとしている。また，PE で to 不定詞を取らなくなった動詞として aspy, assay, enforce, force が挙げられる。

以下では(6)に挙げた動詞の性質を観察する。

2.1. 自己使役の動詞

前述の通り(6)の動詞はいずれも労苦の意味を持ち to 不定詞を取るが，その意味的特徴によって自己使役の動詞と他者志向の動作を表す動詞の２種類に分けられる。本節ではまず前者を観察する。自己使役の動詞とは，自己使役の意味を内包する非能格動詞である。ここで言う自己使役の意味の内包とは当該の動詞が"to exert oneself"の意味を内包しているということである。このタイプには apply, attend, busk, contend, endeavour, enforce, entermete, envy, force, intend, labour, look, make, press, procure, strive, struggle, study, sweat, swink, till, travail の 22 の動詞が属する。

(9) a. Every man that means to live well, *endeavours to trust* to himself.

(1594 Shakes. *Rich. III*, i. iv) [*O*]

b. She vseþ ful flatryng familarite wiþ hem þat she *enforceþ to bygyle*.

(c1374 Chaucer *Boeth*. ii. i. 30) [*O*]

c. He that *forseth* manye thingus *to do*, shall fallen in to dom. (1382 Wyclif *Ecclus*. xxix. 19) [*O*]

これらの動詞が自己使役を内包することは，内包された再帰代名詞が具現することがあることから窺える。

(10) a. *Applying him self* to do good dedis. (1477 Earl Rivers (Caxton) *Dictes* 9) [*O*]

b. He..moche *endeuoyred hym* to make hym to lerne the deuyne Scripture.

(1483 Caxton *Gold. Leg*. 422/3) [*O*]

c. Suche as *enforcen hem* rathere to prayse youre persone by flaterie.

(c1386 Chaucer *Melibeus* ¶209) [*O*]

d. Sothely fra þat tym furthe I *forced me* for to luf Jhesu. (c1340 Hampole *Prose Tr*. 6) [*O*]

e. And to the bed with that he yede..And *made him* there forto seche.

(1390 Gower *Conf*. I. 188) [*O*]

f. Euery beest *trauaylith hym* to deffende and kepe the sauacion of hys lyf.

(c1374 Chaucer *Boeth*. iii. pr. xi. 76 (Camb. MS.) [*O*]

---

[7] それぞれの動詞における労苦の意味は，*M*, s.v. *loken* 6a, *O*, s.v. *procure* 2, *O*, s.v. *study* 4a を参照されたい。

再帰代名詞と共起する動詞は apply, busk, endeavour, enforce, entermete, force, intend, labour, look, make, press, study, swink, till, travail である。残る attend, contend, envy, procure, strive, struggle, sweat は再帰代名詞との共起はない。次に strive の例を示す。

(11) And therfore we *stryuen* ... whether absent, whether present, for to plese him.

(1382 Wyclif 2 *Cor*. v. 9) [*O*]

再帰代名詞との共起が見られない動詞のうち，contend, envy, strive, struggle はがんらい「戦う」を意味する動詞である。「戦う」の概念と労苦(endeavour)の概念は相互に移行しやすく[8]，近い関係にあると考えられる。残る attend, procure は「注意を向ける」という自己使役的な意味から労苦の意味を発達させている[9]。また，sweat は再帰代名詞を取る用法を持たないが，目的語に汗や血など人体の一部を指す名詞を取る。比喩的に再帰的な用法と持つと見なせるだろう。

このように，自己使役の動詞は，目的語を取る場合はそれが再帰代名詞であることが多いが，ME から ModE においては，再帰代名詞以外の名詞句を取ることがあった。これらの名詞句は to 不定詞と同じように労苦の目標を表す。次の例を参照されたい。

(12) a. That the poor man for dread dare not *apply his busines*. (?1495 *Plumpton Corr*. 123) [*O*]

b. That himself might *attend his own security*. (1649 Selden *Laws of Eng*. ii. xiii. (1739) 69) [O]

c. In vain do Artists *endeavour the reduction of metalls* into their first matter.

(1641 French *Distill*. vi. (1651) 175) [*O*]

d. *Two things* I must *labour*, That neither they upbraid, nor you repent you.

(1611 B. Jonson *Catiline* iii. i) [*O*]

e. The Precheouris and utheris *travelling the charge of ministerie* within the kirk.

(1569 *Reg. Privy Council Scot*. I. 673) [*O*]

この用法は，上記の５つの動詞の他に，intend, study, sweat, till に見られる。

自己使役の動詞が「攻撃する」などの他者を対象とした行為を意味する例が見られる。

(13) a. It is nought but *a learned ministry* which their champion Martin *endeuors*.

(1589 Nashe *Almond for P*. 17 a) [*O*]

b. [He] *laboured the King*..earnestly for their pardons and obtained it.

(1633 Campion *Hist. Irel*. ii. iii. 75) [*O*]

(13a)では endeavour が「攻撃する」の意味で，(13b)では labour が「働きかける」の意味で使われている。自己使役の動詞が他への働きかけを意味するのはまれであり，22 の自己使役の動詞

[8] *O*, s.v. *strive* を参照されたい。
[9] *O*, s.v. *attend, procure* を参照されたい。

のうち endeavour, enforce, force, labour, press の５つに限られる[10]。

労苦の目標は上述の to 不定詞と名詞句の他に，定形節（that 節）で具現することもある。

(14) a. The Scots were very..vigilant all night, and *attended that their enemies should not escape*.

(1612 Monipennie *Chron. in Misc. Scot.* I. 38) [*O*]

b. It were more charitable to *endeavour that the errors might be taken away.*

(16.. Father Walsh in Scotsman (1883) 17 Sept. 2/6) [*O*, 遠峯 2011:63]

c. They should chiefly *study, that..clemency might clearly be seen in the punishment.*

(1656 Earl of Monmouth tr. *Boccalini's Advts. fr. Parnass.* ii. vi. (1674) 145) [*O*]

(14)では attend, endeavour, study が労苦の目標を表す that 節を取っている。定形節と共起するのは自己使役の動詞のうちこの３つに限られる。

最後に，自己使役の動詞が補部を取らずに使われる例を観察されたい。

(15) The pardon of his Holines, giuen to all ... that ... *indeuor* in this quarrel. (1588) (=(5b))

(16) a. Although he *striu'ed*, and tooke great pains, asmuch as in him lay.

(1582 Breton *Flourish upon Fancy* (Grosart) 52/2) [*O*]

b. Who *trauaylleth* wel, he hath euer brede ynough for to ete.

(1484 Caxton *Fables of Æsop* vi. xvii) [*O*]

(15)では endeavour が，(16)では strive, travail がそれぞれ補部を取らずに使われていることに注意されたい。このような用例が観察されるのは，apply, busk, endeavour, entermete, intend, labour, press, strive, study, sweat, swink, travail の計 12 の動詞である。

次節では他者志向の動作を表す動詞を観察する。

2.2. 他者志向の動作を表す動詞[11]

他者志向の動詞は，自己に向かう動作ではなく，他者を志向する動作を表す動詞である。ここには aspy, assay, attaste, attempt, cun, enterprise, fraist, invent, offer, prove, pursue, seek, taste, try, undertake の 15 の動詞が分類される。次に aspy と undertake の例を示す。

(17) a. Iðe wildernesse heo *aspieden* us *to slean*. (c1230 *Ancr. R.* 196) [*O*]

b. Among your knyghtez all that ther is on Shall *vnder take to Answer* for this lande.

(c1440 *Generydes* 3175) [*O*]

---

[10] *O* s.v. *envy* は，そこに挙げられている目的語を取る３例について同音異義語の envy との混乱があった可能性を述べている。そこで本論ではこれら３例を除外した。

[11] 以下では便宜的に「他者志向の動詞」とする。

上記 15 の動詞のうち espy, attaste, cun, taste を除く 11 の動詞が to 不定詞を取る用法の他に労苦の目標を表す名詞句を取った。

(18) a. *The which thing* Egipciens *asayinge* weren deuourid. (1382 Wyclif *Heb*. xi. 29) [*O*]

b. This bordeller..that be hire body wolde Take avantage, let do crye That what man wolde *his lecherie Attempte*..Lei doun the gold. ((a1393) Gower *CA* (Frf 3) 8.1417) [*M*]

c. That hath enrag'd him on, to *offer strokes*. (1597 Shakes. *2 Hen. IV*, iv. i. 211) [*O*]

この種類の動詞の特徴としてもう 1 つ挙げられるのは，名詞句を取る場合に，労苦の意味とは異なる，他者を対象とする動作の意味になることである。15 の動詞のうち aspy など 11 の動詞が「試す」「調べる」などを意味する。

(19) a. For to *aspie hem* [lovers] boþe þat tide, After swiÞe he ran.

(c1330(?c1300)*Amis*(Auch)731)[*M*]

b. How they hadde *attemptyd* ... the science Off wyse philomon.

(c1450 Lydg.*SSecr.Ctn*.(Sln 2464) 2516) [*M*]

c. They sall not than *the Cherrie cun*, That wald not enterpryse. ..

(1597 Montgomerie *Cherrie & Slae* 646) [*O*]

d. My servand I will found and *frast*. (c1460 *Towneley Myst*. 36) [*O*]

e. This he sayde to *prove hym*, For he hym sylfe knewe what he wolde do.

(1526 Tindale *John* vi. 6) [*O*]

f. Kyngis & lordis schulden..wiþ most diligence *sike þe cause* þat þei knowe not .. .

(c1380 Wyclif *Wks*. (1880) 231) [*O*]

g. He lyht Adown..and *tasted his harneis* In that stede, þat it scholde not faille whanne he hadd nede. (c1450 Lovelich *Grail* lii. 603) [*O*]

(19)では，aspy, attempt, cun, fraist, prove, seek, taste が「調べる」の意味を持ち，目的語は調査の対象を表す。目的語は調査の対象であり，有生・無生に関して制約はない。これら以外の enterprise, invent, offer, undertake では，目的語は行為を表す名詞となる。次の例を観察されたい。

(20) a. How Trystram *enterprysed the Bataylle* to fyght for the trewage of Cornwayl.

(1485 Malory *Arthur Contents* vii. v) [*O*]

b. Throw counsell of his wyf he *inuented the kings slauchtre*.

(1596 Dalrymple tr. *Leslie's Hist. Scot*. v. 288) [*O*]

c. That hath enrag'd him on, to *offer strokes*. (1597 Shakes. *2 Hen. IV*, iv. i. 211) [*O*]

d. Telle me..what he sayeth of *this quarell* that ye have *vndertake*.

(c1489 Caxton *Sonnes of Aymon* xxvi. 549) [*O*]

(20)に例示した enterprise, invent, offer, undertake は他者を対象とする行為ではなく，「しようとする，計画する，成し遂げようとする」という労苦の意味を持ち，いずれも行為を表す無生の名詞を取っている。

他者志向の動詞のうち，２つの動詞に限り再帰代名詞を取る例が見られた。

(21) a. Even before it could be done in due form, the chiefs of the nation did not *attempt themselves* to exercise authority so much as by interim.

(1791 Burke *Let. Memb. Nat. Assembly Wks*. VI. 46) [*O*]

b. I woll *assay myselffe* to draw oute the swerde. ((a1470) Malory *Wks*.(Win-C) 62/11) [*M*]

まず attempt については，遠峯 (2012:92)が *O* の全文検索で１例のみ見つかったと報告している。次に，assay については *M* (s.v. *assaien* 6a) に３例が挙げられられている。この２つの動詞以外で，他者を対象とする動詞が再帰代名詞を取る例は今回の調査では見つからなかった。

他者を対象とする行為を示す動詞は定形節を取る例では労苦の意味を持たない。その代わり，「試す」の意味や，「知る，発見する」など認識的な意味を持つ。

(22) a. Yf thou hast preued and *assayed* that I am the temple of god byleue it.

(1483 Caxton *Gold. Leg*. 93/4) [*O*]

b. Swiche hertes [fondeð þe fule gost ... and][12] *cunneð* gif he mai þer inne herbergen.

(c1200 *Trin. Coll. Hom*. 87) [*O*]

c. Ile *trie* how you can Sol, Fa, and sing it. (1596 Shakes. *Tam. Shr*. i. ii. 17) [*O*]

(22a)では assay が「経験によって知る」の意味[13]で使われ，後続の that 節はその内容を表す。(22b)の cun そして，(22c)の try はそれぞれ if と how で導かれる間接疑問を取り，「試す」の意味で使われている。

補部をいっさい取らない例も見られる。

(23) a. Our doubts..make vs loose the good we oft might win, By fearing to *attempt*.

(1603 Shakes. *Meas. for M*. i. iv. 79) [*O*]

b. Yet he *proved* against this inconvenience, with as much caution as a by-past error is capable to admit. (a1659 Osborn *Observ. Turks Wks*. (1673) 272) [*O*]

この用法を持つ他者志向の動詞は少なく，上に例を挙げた attempt, prove に加えて，assay, enterprise, try の計５つの動詞に限られる。

---

[12] 角かっこは筆者による。Morris (1873:87)を参照されたい。

[13] *O*, s.v. *assay* †11 を参照。

2.3. 本節のまとめ

本節では，調査対象とする労苦の動詞を Visser (ibid.)のリストから抽出し，ME と ModE についてそれらの資料を提示した。提示に際しては調査対象の動詞を意味的な特徴によって２種類に分けた。

２種類のうち１つは自己使役の意味を内包する動詞である。これらの動詞はその意味的な特徴から目的語が具現する場合は原則として再帰代名詞となるが，ME, ModE においては，再帰代名詞以外の名詞句で労苦の目標を具現させた。労苦の目標は定形節でも具現した。また，ごくまれに名詞句を取る用法で「攻撃する」などの他者志向の動作を表す意味を持った。さらに，補部をいっさい取らない用法も持った。

もう１つの種類は，他者志向の動作を表す動詞である。これらは自己使役の動詞とは対照的に，他者に向かう動作を表し，原則として再帰代名詞と共起することはない。これらの動詞が名詞句を取る場合は，その名詞句の意味は２つある。１つは労苦の目標である。もう１つは，動詞が労苦の意味ではなく他者を対象とする動作を意味し，名詞句はその動作の対象を意味する。定形節を従える場合は，動詞が労苦の意味ではなく，「試す」の意味や「知る」「発見する」などの認識的な意味になる。きわめてまれに再帰代名詞を取り，自己使役の意味を持つと考えられる例も見られた。さらに，補部をいっさい取らない用法も見られた。

次節では本節で示した資料について考察する。

３．考察

前節では attempt, endeavour を含む 37 の労苦の動詞について ME と ModE の資料を提示した。この資料から，これら 37 の動詞はすべて労苦の意味を持ち to 不定詞を伴って使われるが，その他の点において違いがあることが明らかになった。以下では，この資料を用いて，第１節で提起した問題の解決を試みる。

まず第１の問題である。Green の指摘した attempt, endeavour に見られる ModE での性質は意味的に類似した他の労苦の動詞で見られるだろうか。この疑問に対しては肯定的に答えることとなる。まず，attempt は ModE において，その補部の to 不定詞を省略する際，省略後に残留する名詞が有生でも無生でも構わなかった。上述の(2)を参照されたい。この性質は ME, ModE において他の労苦の動詞で見られる。次の例を観察されたい。

(19) a. For to *aspie hem* [lovers] boþe þat tide, After swiÞe he ran.

b. How they hadde *attemptyd ... the science Off wyse philomon.*

c. They sall not than *the Cherrie cun*, That wald not enterpryse.

d. *My servand* I will found and *frast.*

e. This he sayde to *prove hym*, For he hym sylfe knewe what he wolde do.

f. Kyngis & lordis schulden..wiþ most diligence *sike þe cause þat þei knowe not.*

g. He lyht Adown..and *tasted his harneis* In that stede, þat it scholde not faiłle whanne he hadd nede.

前節で述べたとおり，(19)では，aspy, attempt, cun, fraist, prove, seek, taste が「調べる」の意味を持ち，有生・無生の目的語を取っている。この用法は Green の提案する to 不定詞省略の実態であろう。例えば，(19a)の“For to *aspie* hem bo̧þe”の aspie は「調査する(to investigate)」の意味である。これに加えて，aspie を起動相を表す労苦の動詞と解し，調査行為を表す動詞が省略されていると解釈すること，つまり “to attempt to investigate”と解することもできるだろう。このようにして， to 不定詞の省略があると捉えられたと思われる。

次に endeavour であるが，上記(4b)に見るとおり ModE において労苦の目標を表す名詞句を取った。この性質は他の労苦の動詞にも見られる。(4b)，(12)を観察されたい。

(4b) ... every man ought to endeavour *peace,* as far as he has hope of obtaining it

(12) a. That the poor man for dread dare not *apply his busines.*

b. That himself might *attend his own security.*

(4b)において endeavour の後に例えば“to obtain”が省略されていることは既に述べた通りである。同様に(12a)においては apply の後に例えば“to do”が，そして(12b)では attend の後に例えば“to achieve”が省略されていると考えられる。ここでも attempt の場合と同様に，to 不定詞の省略は目的語を取る性質から生じたものと捉えられるかもしれない。

以上で Green の指摘する ModE における attempt と endeavor の性質は他の労苦の動詞にも見られることが分かった。ここで２つ目の問題に移りたい。Attempt, endeavour とそれぞれ性質を共有する動詞は，自己使役の動詞と他者志向の動詞として意味的に定義できることに注意されたい。自己使役とは上述の通り“to exert oneself”の概念であり，これは原則として目的語として名詞句を取らないことを意味する。次に endeavour の例を再掲する。

(10a) Every man that means to live well, *endeavours* to trust to himself.

これと対照的に他者志向の動詞は，自己使役の動詞との混同と考えられる例外的な場合を除いて，再帰代名詞を取ることがなかった。目的語は労苦の目標を表す名詞句や，あるいは労苦の意味から離れてその動詞が持つ他者志向の動作の対象を表した。

(17b) ... let do crye That what man wolde *his lecherie Attempte*..Lei doun the gold.

(18g) He lyht Adown..and *tasted his harneis* In that stede, þat it scholde not faille whanne he hadd nede.

２種類の間の意味の違いは定形節の機能にも反映が見られる。他者志向の動詞は「試す，調査する」という意味を持つため，定形節は試行内容や調査の内容を表す。これに対して，自己

使役の動詞の定形節は動詞の表す動作，すなわち労苦の目標を表す。

(22a) Yf thou hast preued and *assayed* that I am the temple of god byleue it.

(14b) They should chiefly *study, that..clemency might clearly be seen in the punishment.*

自己使役の動詞と他者志向の動詞という意味による２分類を仮定すれば，再帰代名詞との共起における違いや，名詞句を目的語として取る際の意味的特徴の違い，そして共起する定形節の意味的特徴の違いが捉えられる。確かに，ME, ModE の資料を観察するとこの２種類の動詞は労苦の目標を to 不定詞や目的語名詞句で具現させる点で共通するが，これらの違いから，２種類に分けて考えるのが妥当と思われる。

４．結語

本論では，37 の労苦の動詞を取り上げ，それらの ME, ModE における意味的，統語的性質を調査した。その結果，Green (1974)が観察する attempt と endeavour の違いが，意味の類似したより広範囲の動詞で ModE だけでなく ME でも見られることを明らかになり，さらに attempt と endeavour に見られる統語的な性質の違いを生んでいると考えられる意味的な特徴が示された。

本論を結ぶにあたり，今後の課題を挙げておきたい。まず最初に，本論では，自己使役の動詞と他者志向の動詞という２つの動詞類について *O* および *M* の項目にある例文と遠峯 (2011, 2012)に資料を限定して性質を検討した。今後は *O* および *M* の全文検索を行いデータベースを拡充し，意味類に加えて，個々の動詞について観察と分析を深める必要がある。

次に，ME, ModE において自己使役の動詞と他者志向の動詞が意味的，統語的性質を互いに近似させたが，なぜそれが PE まで保持されなかったのかという疑問がある。意味や統語的性質が近似した動詞が増えすぎることを避けるためかもしれないが，今後さらに調査と分析が必要であろう。これと関連して，ME, ModE から PE に至るまでの間で to 不定詞を取り労苦の動詞として使われる語が絞り込まれている事実がある。本論で調査の対象とした 37 の動詞のうち，PE までに５語が廃語になっている。残る 32 語中で PE まで to 不定詞を取る用法を保持しているのは 10 語に過ぎない。労苦の動詞全般についてより包括的な調査が行われるまで最終的な結論は待たなくてはならないが，動詞の絞り込みが起きていることが疑われる。無論，類義語の淘汰が起きたことはあるだろうが，そのような要因を除いて絞り込みの起きた理由を検討することは必要かもしれない。

定形節が間接疑問で具現する(22b, c)のような例についての検討も現在のところ不十分であり，今後進めていく必要がある。

(22) b. Swiche hertes [fondeð þe fule gost ... and] *cunneð* gif he mai þer inne herbergen.

c. Ile *trie* how you can Sol, Fa, and sing it.

このような間接疑問を取る例は他者志向の動詞に見られる現象である。このような現象が労苦の動詞の to 不定詞と取る用法の発達に関係したのかどうかを検討することが必要であろう。

(15), (16), (23)のような補部を取らない用法や，(13)のような自己使役の動詞に見る「攻撃する」の用法についても今後継続的に検討が必要である。

最後に課題として挙げたいのは，前置詞句の機能である。例えば，自己使役の動詞 endeavour においては at と for のいずれも従えた。

(24) a. Which the world never..gave them any thanks for *endeavouring at*.

(1704 Swift *T. Tub Author's Apol.*)[*O*]

b. A bloody king *endeavoured for* his destruction. (1649 Jer. Taylor *Gt. Exemp.* i. viii. 113) [*O*]

この２つのうち，at は to 不定詞と同等の機能を持っていることが次の例から推定される。

(25) I endeavoured *at* no beauty of style, but *to* keep as literally as I could to the sense of the author Epictetus.

(1710 Lady M. W. Montagu *Let. to Bp. Salisbury* 20 July (1893) II. 2) [*O*, 遠峯 2011:63]

(25)では at で導かれる前置詞句と to 不定詞が but で等位接続され，両者の機能の同等性が示唆されている。For で導かれる前置詞句の機能が to 不定詞と同等であるのかそうでないのかは経験的な問題であり，今後の課題である。

参考文献

Green, G. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*, Indiana University Press, Bloomington.

Kurath, H., S. M. Kuhn, J. Reidy, R. E. Lewis (eds.) (1952-) *Middle English Dictionary*, University of Michigan Press, Ann Arbor. (http://quod.lib.umich.edu/m/med/)

Los, B. (2005) *The Rise of the To-Infinitive*, Oxford University Press, Oxford.

Morris, R. (1873) *Old English Homilies of the Twelfth Century: From the Unique MS. B. 14. 52. in the Library of Trinity College, Cambridge*, Early English Text Society, N. Trübner.

Rudanko, J. (1989) *Complementation and Case Grammar*, State University of New York Press.

Simpson, J. A. and E. S. C. Weiner (eds.) (1989) *The Oxford English Dictionary*, 2nd Edition on CD-ROM Version 1.14 (1994), Clarendon Press, Oxford.

遠峯伸一郎 (2011)「Endeavour の補部に見る通時的変化について」『鹿児島県立短期大学紀要』63, 89-97.

遠峯伸一郎 (2012) 「Attempt の補部に見る通時的変化について」『鹿児島県立短期大学紀要』64, 57-67.

Visser, F. Th. (1963-73) *An Historical Syntax of English Language*, 4 vols. E. J. Brill, Leiden.

2015 年 8 月 23 日 受理